

序にかえて

「ドイツ国歌」をめぐる

女子栄養大学教授 佐藤 洋子

本学でドイツ語を教えてきた歳月に改めて時を感じさせるものは、ドイツに限っても、ベルリンの壁の建設、その劇的な崩壊と東西の統一などこの間に歴史に刻み込まれた数々の出来事である。それらは教える身にも学ぶ側にも教科書の向うに実在するドイツの国や人々を身近に感じさせ、関心を高める機会を与えるものであった。

統一の日は急速「ドイツ国歌」を取り上げた。語学的な解説に加えて周辺の歴史的な経緯に話が進むにつれて、前年から成り行きを見守って来た学生たちにも歌の心は伝わり、やがて感激の歌声が教室に響いていった。ドイツの象徴であり、生きた教材ともなった「ドイツ国歌」の辿った運命を簡単に紹介して序にかえたい。

ドイツ連邦共和国国歌

Einigkeit und Recht und Freiheit
Für das deutsche Vaterland!
Danach laßt uns alle streben
Brüderlich mit Herz und Hand!
Einigkeit und Recht und Freiheit
Sind des Glückes Unterpfand –
Blüh' im Glanze dieses Glückes,
Blühe deutsches Vaterland!
統一と権利と自由を
祖国ドイツのために！
それを求め努め励まん
はらから同胞われら心をつくし身を砕き！
統一と権利と自由こそ
幸せの証し！
栄えよ この幸せの輝きに
栄えあれ 祖国ドイツよ！ （訳：佐藤）

1841年 A. H. H. V. ファーラーズレーベン（1774）がハイドンの曲に合わせて作詩した三節から成る〈Das Lied der Deutschen〉「ドイツ人の歌」通称〈Das Deutschlandlied〉「ドイツの歌」の第三節が現ドイツ国歌である。

この詩はしかし最初から国歌として書かれたものではない。1815年ウィーン会議で成立した、当時の「ドイツ

連邦」は主権を持つ35の領邦と4つの自由都市から成る連合体に過ぎず、領邦を越えたドイツ国家の実態は存在しなかったのである。国民感情も国家意識も未熟のままであった。

しかし、フランス革命とナポレオンに敗れた経験を通して、人々の心にはようやく民族意識が芽生え、やがて「ドイツ人の国」の必要性が自覚されていった。封建的支配体制を脱し、自由・平等な社会を実現する民主国家を目指す統一運動が市民の間に高まる中、反動勢力の弾圧と戦いながら「ドイツ民族」への愛と「統一」への熱い思いをこめてこの詩は詠われたのである。

30年後統一は成った。が、それはプロイセン国王を君主とする帝国であり、「ドイツ人の歌」が国歌となるにはワイマール共和国の誕生を待たねばならない。第一次大戦後の苦境に喘ぐ国民を励まし復興への勇気を鼓舞するため、これを国歌とする宣言がなされたのが1922年である。その後ナチスの時代にもナショナリズム高揚の目的で党歌と並んで盛んに歌われ続けている。

第二次大戦後はこれをそのまま国歌とするには問題があった。かの有名な〈Deutschland über alles〉という句が「世界に冠たるドイツ」と解釈され（本来は「何よりも領邦分立を越えたドイツ」の意）、覇権主義の標榜と批判されたのが主な理由である。詠まれている国境も変わったという事情もあった。新国歌構想も民意に迎えられず、紆余曲折を経て東西統一後の1991年、時のワイツゼッカー大統領とコール首相の間で「歴史の一記録としてこの歌は全三節をもって一体とする」とした上で「第三節がドイツ国民の国歌である」と決められた。作詩から150年が経っていた。しかし国家の普遍的なありようを詠い上げるこの第三節はいつまでも若々しい生命を保ち、時を越えてドイツの人々に愛され、所を越えて真理を告げ続けるであろう。

ドイツ語の響きとともに、この日の事は学生たちの記憶に留っていると信じている。外国語の学習は外の世界を知り心を交わし合うためのものである。思えばそのために必要な力を如何にして身につけさせようかと模索を重ねた40年余であった。